

会派名		沼田創生会	氏名	齋藤育子
1	期 日	令和6年2月13日		
2	調査事項	川崎市工業団地視察、日本人の景観認識と景観政策についての勉強会		
3	所 感	調査後の考察(感想、政策提言、本市にどのように活かせるか など)を記入		
【所感】講師：				
①川崎市工業団地について				
		川崎ゼロ・エミッション工業団地 事務局長 伊藤和良 氏		
横塚工場適地の事業進展に伴い、先進地である川崎市を訪問。事業の立ち上げから様々な苦悩を乗り越え、壮大な事業を成し得た講話であった。失敗を常に研究し続け、職員が異動の負荷に関係なく完結させる意思、行政の本気度が問われるが、「企業は生死を賭けている、行政の責任は重い」という言葉に、この事業に対する全ての思いがこもっていた。 また、産業観光として、団地内企業を見学できるという取組も評価できる。横塚工場適地の規模とは遙かに差があるが、現在の進捗に漠然とした懸念を抱いているとの言葉を受け、企業誘致の難しさを改めて感じた。伊藤氏を本市へお招きし、講義をいただくのも良いのではないかと思う。				
②日本人の景観認識と景観政策について				
		大東文化大学名誉教授・日本景観学会会長 土岐 寛 氏		
日本の都市は一部地域を除き、ヨーロッパ諸国に比べると都市景観の秩序と美的調和の面で問題を抱えているという苦言から始まった。そこにどれだけの人々が意識を働かせているのだろうか。森林文化都市やまちづくり事業を考えたときに景観の重要さを感じた。ヨーロッパ諸国では、長い歴史を経て形成された都市空間に人々が誇りを持ち、精神的基盤になっていたという。人間と同様に都市も記憶が保たれ、過去と現在の繋がりを看取してきたことが景観に反映している。景観事業を進めるに当たり地域ごとに景観のコンセプトを定め、市民の誰もが記憶に残るまち、それが文化そのものになるのではないかと期待する。				

会 派 名		沼田創生会	議員名	相澤宗利
1	期 日	令和6年2月13日(火) ～ 令和6年2月13日(火)		
2	調 査 事 項	かわさきゼロエミッション工業団地視察、土岐寛教授講義		
3	所 感	調査後の考察(感想、政策提言、本市にどのように活かせるか など)を記入		
今回はかわさきゼロエミッションの視察と大東文化大学の土岐寛教授による「日本人の景観認識と景観政策」について講義をうけてきました。				
はじめに、川崎市の「かわさきゼロエミッション」は、地球温暖化対策と持続可能な社会の構築を目指す取り組みの一環だそうです。このプログラムは、二酸化炭素などの温室効果ガスの排出を削減し、エネルギー効率的な利用や再生可能エネルギーの導入を推進することを目的として、日本の工業団地としては先進的な取り組みとされています。SDGsの概念に先駆けて環境問題に取り組まれてきました。歴史としては、江戸時代に沿岸部の埋め立てが始まり、その後重化学工業や軍需産業などの工場が集積する場所となりました。高度経済成長期には化学コンビナートがあったこともあり、公害問題が深刻化したため、「青い空、白い雲を求めて」をスローガンに川崎エコタウン基本方針を策定して新たな環境問題への取り組みを始めたものです。講義を聞いて思ったことは環境対策と経済合理性が反比例することなく実現できるものなのではないかと考えました。特に沼田市は森林文化都市を標榜していますので、現在造成している工業団地においても自然環境と調和した工業団地の進め方などを大いに検討する必要があると感じました。また、一番印象深かったのは、担当者の方の熱意でした。会派から企業団地に必要なのは何かを質問したところ「企業を誘致することは簡単なことではない。企業側は社運をかけて工場を作りに来る。それに対してどれだけ誘致する側がどれだけ熱意を持って対応ができるかが重要。企業が命がけで来るので、こちらも命がけで臨めるかが問われる。」ということをかなり強くおっしゃっていました。行政には知識や技術など必要なことは多いかもしれませんが、やはり人の熱意が人を動かすんだということを再認識しました。				
次に土岐寛教授の講義で感じたことは、日本の都市景観の統一性低さです。教授はヨーロッパの国々の写真を多数見せて説明をしてくれましたが、どのまちも高さ、材質、色使い、周辺環境との調和がなどの面から統一性があることや歴史的な背景を残していることが印象的でした。やはり、歴史などの文化を軸に据えた統一性のあるまちづくりは街に物語性を与え来訪した人たちの効用につながるものと感じました。沼田市は森林文化都市や真田の町などの側面を持っていますが、これをもっと前面に押し出すことで来る人が街を歩くだけで楽しんでもくれるような街の形成ができるのではないかと思います。群馬県内で多くの自治体が景観行政として登録しているなかで、沼田市は景観行政に登録されていません。私が所属する経済建設委員会でも一年を通して景観条例について議論を深めていきたいと考えていますので、統一性と軸となる物語についてよく検討したいと考えました。				

行政調査報告書

令和6年2月25日

会派名		沼田創生会	委 員 名	木内 修一
1	期 日	令和 6 年 2 月 13 日(火)		
2	調査地	神奈川県川崎市及び東京都千代田区		
3	調査事項	川崎市ゼロ・エミッション工業団地における取組について 景観条例について		
4 【所感】				
○ <u>川崎市ゼロ・エミッション工業団地における取組について</u>				
<u>訪問先</u> ： 神奈川県川崎市経済労働局イノベーション推進部(フロンティアビル)				
<u>講義説明</u> ： 川崎市ゼロ・エミッション工業団地 事務局長 伊藤和良氏				
京浜工業地帯の中核として日本の高度経済成長期を牽引してきた川崎市であるが、過去に戦争による混乱と空襲被害、環境汚染などの公害問題を乗り越えて現在に至っている。臨海部の埋め立てを進め、石油コンビナートを完成させ重化学工業都市を形成してきた。				
現在、「環境未来都市」となった川崎市は、エコタウン構想のモデル施設の「ゼロ・エミッション工業団地」の企業グループにおいて、リサイクルを徹底し廃棄物ゼロを目指した取り組みを数多く実行している				
沼田市では今後、北部工業団地の拡張や横塚産業団地の企業誘致が進められるが、それぞれの団地の理想とした在り方と理念を、行政と企業と市民がしっかりと認識し共有することで、雇用、定住、発展に繋がるものとする。特に企業誘致では、その企業経営が継続して成り立つよう長期的なビジョンを明確にし、情熱をもって誘致を進めて頂きたい。				
○ <u>景観条例について、その必要性と取り組み方について</u>				
<u>講義場所</u> ： 東京都千代田区神保町ビジネスセンター				
<u>講師</u> ： 大東文化大学 名誉教授 土岐寛氏				
講義いただいた土岐寛教授は、日本景観学会の会長であり、一部地域を除いた、秩序と美的調和の面で問題を抱えている日本の多くの都市景観につて、諸外国と比較しながら、あるべき日本の景観政策を考察し研究されている。歴史の厚みと記憶の重属性と、過去と現代のつながりを景観に反映することで、景観認識が共有され、その蓄積により文化そのものとなる。				
本市まちづくりにおいても景観法を理解した上で、基準や規範について整理し、日本国内で独自の景観政策を展開している他府県の事例を参考にしながら、沼田市に合った都市景観を実現し、市民の意識を「美しいまちに住む幸福」に繋げていけたらと思う。				

会派名		沼田創生会	委 員 名	小野塚正樹
1	期 日	令和 6 年 2 月 13		
2	調査事項	神奈川県川崎市 （ゼロエミッション工業団地）		
3	所 感	調査後の考察（感想、政策提言、本市にどのように活かせるか など）を記入		
【結論：調査を実施しての今後について】 ① 沼田市横塚産業団地の推進に向けて、企業誘致活動・環境への配慮・市民参加・見学ツアーや視察対象など付加価値の高い産業団地になる様に努める。 ② 横塚工業団地成功の一助として川崎市ゼロエミッション工業団地事務局伊東氏に沼田市で講演いただくことを目標にする 【調査概要】 ●川崎市ゼロエミッション（以下ゼロエミ）工業団地の概要 この工業団地の個々の企業は廃棄物の削減に取り組んでいる。しかし企業単独の削減には限界はあるが、企業が集積していることで互いの廃棄物を利活用しながら、ほぼゼロまで活動が推進している。 ひとつの事例ですが企業が排出する紙について紹介します。 企業や市民が排出する紙を、ゼロエミ工業団地内でリサイクルを行いトイレットペーパーとして還元していました。本来製紙業は多くの水を使用する業種のため、水量の豊かな土地で起こる産業ですが、水源のない川崎市では下水処理水を高度処理して紙のリサイクルに取り組んでいます。都市に紙という森林資源を見出し、更に排水まで活用しならゼロエミに取り組んでいる志向の高さと、企業・市民・行政の力が結集していることに感銘しました。 また、その取り組み自体を売物に変化させ今回の様な視察の受け入れや、東京湾工業団地夜景ツアーなど多くの付加価値を生んでいます。 これから沼田市で始まる横塚産業団地の推進に向けて、企業誘致活動は当然のことながら市民も参加し見学ツアーや視察など付加価値の高い産業団地になるように努める所存です。 【以下所感】 ●川崎市工業団地の歴史について 江戸時代から埋め立てが始まり、明治時代には欧米との産業力の差を感じた浅野総一氏らを始めた経済人が元となり団地の造成に取り組む。 一大工業団地に成長していくが、関東大震災の被災や戦争での攻撃目標となり焼野原に。 戦後の 1950 年から 1970 年代の高度経済成長や産業の変化により、以前に増して工業団				

会派名		沼田創生会	議 員 名	桑原 敏彦
1	期 日	令和6年2月13日（火）		
2	調査事項	① 川崎市ゼロ・エミッション工業団地について ② 日本人の景観認識と景観政策		
3	所 感	調査後の考察（感想、政策提言、本市にどのように活かせるか など）を記入		

① 川崎市ゼロ・エミッション工業団地について

川崎ゼロ・エミッション工業団地は、川崎市のエコタウン構想のモデル施設としてエコタウン地区内の川崎市川崎区水江町に形成されています。

（2002年11月操業開始）ここでは、事業活動から発生する排出物や副生物を可能な限り抑制するとともに、これらの再利用・再資源化やエネルギーの循環活用等を図り、環境負荷の最小化を実現する事を目指しています。

さらに、川崎ゼロ・エミッション工業団地での循環型システムの稼動を契機に、その輪を広げ、地域全体でのゼロ・エミッション化を進める事を目指しています。

●川崎ゼロ・エミッション工業団地のコンセプト

- ① 企業自体が環境基本方針を持つ。
- ② 発生する環境負荷をその排出基準などより、更に高い目標（ゼロ・エミッション化）を掲げて取り組む。
- ③ 団地内を構成する他の企業との連携により効率のより取組を行う。
- ④ 可能な限り環境負荷要因を企業間での連携により行程に内部化する。
- ⑤ 団地内でゼロ・エミッション化できない事柄について、共同で周辺の循環系の機能とリンクすることにより、トータルのゼロ・エミッション化を図る。

●川崎ゼロ・エミッション工業団地での具体的な取組

- ① 企業内で発生する廃棄物を、目標を定めて積極的に抑制
- ② 企業内で発生する紙類廃棄物は、組合で収集し団地内企業で再生
- ③ 焼却施設の廃熱エネルギーの再利用
- ④ 団地内においては、川崎市入江崎水処理センターの高度処理水及び工場内処理水を再使用
- ⑤ 企業内において、水資源はできるだけ循環使用し廃水処理設備の負荷を定減
- ⑥ 焼却灰をセメント原料として再利用
- ⑦ 企業内で発生する生ごみをコンポスト化し、団地の共同緑地内で肥料として再利用
- ⑧ 雨水を団地内防水用水や植栽への灌水として利用
- ⑨ 近隣企業との共同受電による共同受電者間の自家発電力有効利用

●視察を行い感じた事

沼田市は現在、横塚工業適地において企業誘致を行っています。その規模は今回視察した川崎市ゼロ・エミッション工業団地に比べると規模ははるかに小規模ですが、立ち上げ時での課題や継続するための企業間との連携がいかに大切であるかがわかりました。また、初年度の進出してくる企業の財政的与信調査等が重要であると感じました。これらを踏まえ、今後の沼田市での企業誘致が成功するよう今回の視察で得た事を活かしていきます。

② 日本人の景観認識と景観政策

日本の都市は一部地域を除いて、電線電柱や派手な屋外広告物、そで看板、垂れ幕、不ぞろいな建築物、放置自転車、自動販売機など、ヨーロッパ諸国等に比べて都市景観の秩序と美的調和ができていないと感じました。沼田市においても、今後は電柱・電線の地中化の推進や、太陽光等の景観等も考えていく必要があると感じました。

行政調査報告書

令和6年2月16日

会 派	沼田創生会	議員氏名	戸部 博
1	日 時	令和6年2月13日(火)	
2	調 査 地	午前：川崎市経済労働局イノベーション推進部 (川崎市川崎区駅前本町11-2フロンティアビル10階) 午後：TKP九段下神保町ビジネスセンター (東京都千代田区神田神保町3-4)	
3	調査事項	川崎市ゼロ・エミッション工業団地における取組について 景観条例の必要性について	
4	所 感	1 川崎市ゼロエミッション工業団地における取組について 説明者：川崎市経済労働局イノベーション推進部 川崎市ゼロエミッション工業団地事務局 かつて、川崎市は京浜工業地帯の中核として日本の高度経済成長時代を牽引した。その一方で、負の側面として急速な環境悪化を招き、大気汚染や水質汚濁などの甚大な公害が生じてしまった歴史がある。そうした苦しい経過を踏まえ、川崎市ではエコタウン構想のモデル施設として川崎市川崎区水江町に「川崎ゼロ・エミッション工業団地」を形成している。「ゼロ・エミッション」構想とは、リサイクルを徹底することにより、最終的に廃棄物をゼロにしようとする考え方であり、地域振興の基軸として推進することにより、先進的な環境調和型のまちづくりを推進することを目的としており、川崎市では環境負荷の低減を効率的・継続的に行うため、個々の工場や事業所で排出抑制を行い、近在工場群を含めて異業種間で連携し、お互いの排出物の再利用・再資源化・エネルギーの有効利用等を進めているところである。 本市の沼田市北部工業団地や沼田横塚産業団地に目を向けたとき、スケール感などの相違はあるものの、川崎市の考え方やアプローチは多いに参考となるものであり、本市にその理念を持ち込んだとき、現在、見込んでいる以上の利益、想定以上の利益が市民、企業、行政にもたらされるのではないかと期待感を抱くところである。 川崎市担当者の説明を拝聴する中で、涙ながら語る姿に並々ならぬ事業への思いと多くのご心労を感じたところである。しかし、そうした信念がなければ「まさに今の判断が企業の浮沈に繋がる」という緊張感と危機感に晒されている企業の信頼を得ることはできなかったのではないかと感じたところである。 一般的に企業活動の目標は効率的に利益をあげることでとされることが多い。私見ではあるが、そうした要素もありながら企業が地域に根ざして末永く活動していくためには、顧客や市場からの満足を獲得し続け、しかも、社会的責任を果たし続ける必要があると考える。	